

新約聖書 ルカによる福音書 10 章 1 節—20 節（新共同訳）

¹その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。²そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。³行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。⁴財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。⁵どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。⁶平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。⁷その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。⁸どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、⁹その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。¹⁰しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。¹¹『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。¹²言うておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。」

¹³「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところでなされた奇跡がティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰の中に座って悔い改めたにちがいない。¹⁴しかし、裁きの時には、お前たちよりまだティルスやシドンの方が軽い罰で済む。¹⁵また、カファルナウム、お前は、／＼天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。」

¹⁶あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのである。」

¹⁷七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」¹⁸イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。¹⁹蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。²⁰しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいらない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「収穫の主」

アッシジの聖フランチェスコは、「裸のキリストに裸で従う」ことを大切に、徹底した清貧で知られているイタリアの修道士です。裕福な家庭に生まれたフランチェスコは、若き日は贅沢な生活を送り、見栄っ張りな浪費家だったとも言われています。ですが、大病を経たなどの後に「神の声」を聞いて回心し、家族の富を放棄し、貧困の誓願を立て、キリストに人生を捧げました。

フランチェスコは、福音伝道の旅には何も持って行かないようにというイエスの言葉に感銘を受けて、キリストに倣う生き方を実践することを決意しました。

フランチェスコの大きな働きのひとつは、貧しい人や病人を助けることに力を尽くしたことです。

本日の福音書は、フランチェスコや多くの宣教者たちに影響を与えた、福音伝道におけるイエスの教えが記されています。

イエスは、十二弟子以外の七十二人を選び、二人ずつ組にして、御自分が行くつもりすべての町や村に先に派遣します（ルカ 10:1）。

彼らは、行く先々で、病人を癒やし、神の国の福音を宣べ伝えるためにイエスから派遣されたのです。

イエスは彼らにこう言いました。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に祈りなさい」（ルカ 10:2）。

「収穫は多いが」とは、伝道活動によってこれから多くの人々が神の国の福音の呼びかけに応えることを意味しています。

畑の収穫時に働き手が少ないと、作物は地にこぼれ落ちて無駄になってしまいます。福音宣教もそれと同じように、多くの働き手が必要だということです。

イエスは彼らを福音宣教に遣わすことについて「狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」と言いました（ルカ 10:3）。それは、神の国を宣べ伝える福音宣教に、困難と危険が伴うことを意味します。いつも人々に受け入れられるとは限りません。遣わされた人々は拒否され、攻撃される可能性もあるのです。

狼と小羊のたとえは、強者と弱者を表します。狼と小羊、すなわち強者と弱者は、違う秩序を生きています。神の国と人の国の秩序は異なります。地上では、人の国の方が神の国よりも強いのです。イエスによって派遣される者、使者の務めは、あえて人の国に入っていき、神の国に生きるよう、すべての人を招くことです。

その務めを果たす時、「財布も袋も履物も持って行くな」とイエスは言います（ルカ 10:4）。神の国の到来を告げる旅に、人間の世界において必要な準備はしないのです。さまざまな困難があっても一切を神に委ねて歩いていく姿勢が、ここで求められています。

イエスは彼らに「途中でだれにも挨拶をするな」と言います（ルカ 10:4）。使いの者、使者は、自分を遣わした者の言葉を伝え、その行いをすることに専念なくてはなりません。誰かに道で会っても、日常の挨拶で心を煩わせたり、時間を浪費してはならないのです。そういったことをしているうちに、神の国が到来したという、何よりも伝えるべき福音がないがしろにされてしまう危険があるからです。

使者たちは道端での挨拶を禁じられる一方で、「どこかの家に」入り、「その家に」留まり、そこを拠点として伝道すべきだと教えられます。宣教はまず、家の中から始められるのです。

家に入ったら、「この家に平和があるように」と平和の挨拶をすること、それが「まず」なすべきことでした（ルカ 10:5）。これは神の救いの到来を告げる祝福の挨拶です。

聖書における「平和」とは、神の救いを表し、神の義が実現し、人々が安全に守られていることです。

そして使者たちは、彼らを受け入れた最初の家に安心して留まり、そこで出された物を食べたり飲んだりして、養いを受けることができるとイエスは告げます。

使者たちはまた、より良い条件や待遇の滞在場所を探し求めて「家から家へと渡り歩く」べきではなく、与えられたもので満足するように求められます（ルカ 10:7）。

さて、イエスから遣わされた七十二人の福音宣教者は、良い成果をもたらしたようです。喜んで帰ってきた彼らは、イエスにこう言いました。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえも私たちに屈服します」（ルカ 10:17）。

そんな彼らに、イエスはこう答えます。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた」（ルカ 10:18）。これは、彼らが悪霊を追い出すたびに、サタンが天から落っこちるのをイエスは見たという意味でしょう。

この「サタンが……天から落ちる」という表現は、おどろおどろしいものではなく、どことなくユーモアの込められたものだったように思います。

これらのやり取りは、イエスから遣わされた七十二人が大きな収穫をおさめた福音伝道のあとの、イエスと彼らの晴々とした喜びの気持ちで交わされたものだったのではないのでしょうか。

本日の福音書は、イエスのこのような言葉で締めくくられます。「しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」（ルカ 10:20）。

たとえば、漫画のようなコミカルな雰囲気での「サタンが天から落っこちる」場面は、子供が楽しく喜びそうなイメージが湧きます。

しかし、本当の意味で魂が喜びに満たされることは、悪霊が服従することよりも、あなたがたの名が天に書き記されていることなのだとイエスは言います（ルカ 10:20）。

私たちは誰もが、いつの日かこの地上での生を終えます。

私たちが地上での生を終えるその時、私たちに魂からの喜びをもたらすものは、悪霊を服従させたことよりも、私たちの名が天に書き記されていることなのではないのでしょうか。

肉体の死を迎えるその時、自身の名が天に書き記されているという魂からの喜びを味わうことができる生き方、心のあり方を心がけながら、私たちはこの地上での日々を共に歩いていきましょう。

お祈りをいたします。

全能の神様。あなたによって遣わされた道のりを私たちが歩むとき、あなたが備えてくださるものに信頼して、平和を宣べ伝える者とさせてください。御子主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 66章 10節—14節（新共同訳）

¹⁰エルサレムと共に喜び祝い／彼女のゆえに喜び躍れ／彼女を愛するすべての人よ。彼女と共に喜び楽しめ／彼女のために喪に服していたすべての人よ。¹¹彼女の慰めの乳房から飲んで、飽き足り／豊かな乳房に養われ、喜びを得よ。¹²主はこう言われる。見よ、わたしは彼女に向けよう／平和を大河のように／国々の栄えを洪水の流れのように。あなたたちは乳房に養われ／抱いて運ばれ、膝の上であやされる。¹³母がその子を慰めるように／わたしはあなたたちを慰める。エルサレムであなたたちは慰めを受ける。¹⁴これを見て、あなたたちの心は喜び楽しみ／あなたたちの骨は青草のように育つ。主の御手は僕たちと共にあり／憤りは敵に臨むことが、こうして示される。

新約聖書 ガラテヤの信徒への手紙 6章 7節—16節（新共同訳）

⁷思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。⁸自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。⁹たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。¹⁰ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。

¹¹このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。¹²肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。¹³割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます。¹⁴しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。¹⁵割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。¹⁶このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

教会讃美歌 131番「聖なる聖なる」、151番「ひとの目には」、256番「すがたは見えねど」、375番「神の息よ」。